

St. Luke's International University Repository

研究雑感:大海を見たい蛙の独り言

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2007-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中島, 弘二 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10285/254

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



研究雑感

— 大 海 を 見 た い 蛙 の 独 り 言 —

中 島 弘 二*

「井の中の蛙大海を知らず」は自分のせまい知識や見解にとらわれ自己中心的考え方しか出来ない人あるいは知識を広げようとしないう人に例えられる諺である。ではこの大海とは何か、他の広い世界といえばわかったようなきがするが、ケースバイケースで色々な意味で使われている。世間一般の常識、各々の職場、地理的広がり、学説、学問的広がり、民族、宗教、動物、政治、経済その他もろもろである。セクショナリズムを越える意味で使われる場合も多い。

この世のなかにはまだ分からないことが多い。大自然の神秘に比べれば物知りになった人類そのものも考えようによっては井の中の蛙であろう。

人文科学関係はさておき、近代に入って人類は自然科学を大いに発展させてきた、自然科学における大海は広がる一方である。新しい真理の発見により新しいテクノロジーが開発され、さらにそれを使って次々と新しい発見をしていくことが繰り返されている。私達はあらゆる面でその恩恵に預かるとともに環境破壊などの副作用に悩まされている。自然科学の一分野である医学においても驚くべき発展がみられる。新しい知見やテクノロジーの波に医療は溺れてしまいそうである。20数年前私達が学生の頃学んだ量の少なくとも倍の量を現在の学生は勉強しなければならない。私の担当している微生物学など毎年試験範囲が増えていく。学生に同情はしながら心を鬼にして尻をたたいている。このままでいけば将来の教育はどうなるのだろうか。

人類は今日にいたるまで地球上の未知の大陸を次々と発見開拓し現在では宇宙に向かって躍進しようとしている。少年の頃夢に胸を膨らませて読みふけた冒険探検物語、発明発見物語から現在の変わりようは私の少年の頃には想像もつかないものであった。これから将来どれだけ変わっていくのかさらに想像もつかない。少年時代読んだ宇宙探検物語は当時はまったくの

空想物語でしかなかった。星空を流れ星のように横ぎっていくスプートニクを見たときの驚き、テレビで月面着陸を見たときの感動は忘れることはできない。日本人宇宙飛行士の毛利博士が宇宙空間で無重量での新しい合金の作製実験を行っている姿を茶の間でテレビでみることが出来るなど私の少年時代には想像もつかなかったことである。しかしこのような国をあげて華々しく行われるビッグサイエンスにもかかわらず、自然界における真理はどれほど征服されたのであろうか。人類は自然における大海をどれほど知ったのであろうか。20数年前権威ある医学者が癌は10数年で征服されると予言していたがいまだ基本的には不治の病である。つぎからつぎに入ってくる新しい知見にも関わらず日常診療においてもまだわからない事だらけである。

大学が教育の場であるとともに真理の探求の場であるならば大学人である限りこのような身ぢかな疑問についてたとえスケールが小さかろうと一つ一つ解明していく努力をすべきである。常に研究心をもっていることで色々な面で物のとらえかたが客観的で、考え方が論理的となり、問題解決にあたり積極的に創意工夫をこらし、必要に迫られて勉強し他の分野の進歩に気分的にも遅れないようになると信じている。どんな小さな研究であろうとも「塵も積もれば山となる」である。その塵を集めて立派な建物にしようといふ捨て場にこまろうとそれは後世の人に任せるとして、目の前にある疑問を解明し日常の診療がより向上するよう努力しなければならない。宇宙開発がメガトン級であるなら私の研究などピコカフェムト級でしかないであろう。自分で試験管を洗い、一人で実験し、手が足りないと家族に手伝ってもらう家内工業的というか内職的というかまことにささやかなものである。年に一報くらいはオリジナルペーパーを一応世界的に知られたジャーナルに出して大学人としてのノルマをこらうじてはたしている。天才的な科学者は試験管一本で研究すると誰かが言っていたが、ただの凡人である私がそう格好よく行くわけがない。失敗ばかりしながら未練たらしく学生実験室でゴソゴソ実験しているのは、小

* 聖路加看護大学教授

本稿は、1992年7月21日に行われたスタッフ研修会においてお話しいただいた内容に加筆していただいたものです。

さな池でゲコゲコ鳴きながら外の世界をのぞき見ようと飛びあがっては落ちている蛙のようである。ただの内科医である私がささやかながら研究をつづける理由はなにも人を驚かせるようなノーベル賞級の大発見をしようと野心をもっているのではない（出来ればそれにこしたことはないが）。夢見る純情可憐な乙女の言葉のようで恥ずかしいが、何か患者さんのために役立つ発見なり開発をしたいからなのである。また過去における小さくとも新しい発見に遭遇したときの喜びが忘れられないからでもある。このワープロをたたいているのをのぞき込んだ家内は「あわれ中年蛙の切ないあがきだね」とヤジった。

自然科学の研究においては自分の出した仮説なり考え方なりを他人に普遍の真理として納得させる作業をしなければならず、当然厳しい批判や反対と戦わねばならない。さらに自分の仮説が正しいかどうか自信が揺らぐ事も多く一般に研究者は孤独である。私は一人でやってるので内輪で議論する相手もないしなお孤独である。「文珠の知恵」は期待できないので一人でアイデアを出さなければならない。実験研究中独り言を心の中でつぶやき自分を励ましたり、同情したり、慰めたり、誉めたり、叱ったりする事も多い。実験がうまくいくと「ご苦労さん」と自分に言いながら帰りに一杯飲み屋によって一人で慰労会をやる（残念会の方が多いが）。昨年暮れのスタッフ研修会で話したこの独り言を文章にしると編集者に言われ、気楽に引き受けたものの半分無責任に喋りっぱなしのものを文章にするのは大変辛く恥いところである。以下に思い出すままに日頃自分に言い聞かせていることを書いてみました。そのほとんどが読者の研究方針に反するもの、自己矛盾しているもの、過激な暴言、生意気なもの、テレビの見すぎ、アホらしいもの、ギザなもの、ふざけたもの、有害なものと思われるでしょうが、しょせん井の中の蛙の独り言だと思ってください。なかにはご参考になるものもあるかもしれません。

○「やわらか頭してますか？」カチカチ頭、マンネリ頭になっていませんか？ 教育なり診療なりルチンの仕事をまんぜんとこなしているとマンネリ頭になり毎日の仕事に何の疑問も持たず、教師や医師として給料分の仕事はできても何の疑問も持たなくなり、研究は出来なくなる（ほとんど頭を使わないで体力だけでやる研究テーマもあるが）。著名な研究者でもマンネリ頭になることがある。「心ここに在らずれば視れども見えぬ」。私の知人は待望の癌ウイルスの発見が他の研究者によって報告されたあと、自分が過去にとった電子顕微鏡写真をもう一度よく見てみたらそのウイルスがいっぱい写っていたそうである。彼は癌細胞ばかり見

とれていたのである。

○「研究テーマは患者さんから」、しかし目的を達成するため領域を気にせず必要ならば脱線せよ（脱線し過ぎて研究のための研究にならないようにしなければならぬが）。研究の目的は患者さんのためになることをするのであるから当然出発点は診療における問題点から始まる。しかし場合によっては医学的発想や知識では解決できない場合もあり、より基礎科学的手段が必要となることがある。だんだん深みにはまっていく場合もあるが出発点は臨床にあることを常に忘れないようにしよう。

○「流行に惑わされるな」。研究において流行ばかり追っていくにはそれなりの人と金と時間と設備がいる。私だって世の脚光をあげスターダムに登りたい、しかし私のささやか研究ではとてもついていけなくなる。地道にやっていくしかない。「何がやりたいか？」も大切だが、「何ができるか？」がもっと大切である。コストパフォーマンスも考えよう。

○すでに他人がやっているかどうか「徹底的に調べよう」。研究結果がでる頃になって、30年まえにやってあったり、到着したばかりの雑誌に載っていたりすることもある。私が18年前にアメリカの雑誌に報告した事を最近ある人が自分が発見したように発表していたよと友人が教えてくれた。抄録を読んでみると私の報告以上のことではなかった。文献検索をしっかりとすれば私の論文は必ず目にとまったはずである。

おなじ事がやってあっても別の価値観でアプローチできればよし。またはすでにやってあることに問題点があるか、それ以上のことができそうならおおいによし。また誰でも考えつきそうなことで誰もやっていないければ、なぜか考えよう。なぜ誰も考えつかなかったのか不思議に思われるものも極めて希にはあるが、泥沼が待ち受けていたり、矢おれ刀尽きた死体累々なのかも知れません。うまくいかなかった研究結果は発表しない方が多い。

○社会生活をするには常識的に、研究する場合は「常識にとらわれずに考えよう」(教科書や文献は間違いだらけだとはじめから冷めた目で見ておこう)。研究に関しては普段勉強しすぎないようにしよう、必要に応じて勉強しよう（単なる物知りは評論家になれても研究者にはなれない）。真っ正面からだけでなく前後左右上下斜めから眺め、他の領域の知識情報を総動員して結び付けて考えよう。違う価値観の人、反対者の立場でも考えて見よう。

農学部の実用微生物学の先生と共同研究をしたことがあるが、新しく発見した細菌の成長因子についての議論において、彼らはそれを使って細菌の培養を促進させ物質生産に利用しようという発想であったが、感染症の治療にあたって細菌を殺すことばかり考えていた私は成長因子の誘導体を作りそれで成長因子を阻害し感染症の治療に利用しようとして提案した（分子レベルの基礎的実験は成功したが誘導体の供給が止まって残念でした）。価値観や発想の違いのおもしろさにお互い感心したものである。

研究結果をみる価値観が違えば同じデータで違う論文がかけられる。最初予想していたものと違う結果がでてでもデータを捨てることなく別の価値観に立って論文を書く努力をすべきである。結果が予想から外れれば外れるほど面白い。転んでもただでは起きないようにしよう。ある酵素に対する抗体を作製し免疫学的にその酵素蛋白を測定しようとした。正常の酵素は再現性よく測定できるが、遺伝的変異酵素は抗体によって測定値が異なり何度やってもうまくいかなかった。モノクローナル抗体もエピトープの概念もなかった時代であり大変とまどった。アミノ酸1個の置換が分子量20万におよぶ高分子の立体構造に変異をきたし抗原性を変えているのであろうという結論にたっした。変異酵素は免疫学的に測定できずむしろ分子の立体構造の異常を証明することに利用出来るという論文を書いた。

○「実験をしながら考える」。必要は発明の母である。手を動かし問題にぶつかってそれを解決するため試行錯誤を繰り返しながら実験を進めていく。悩みながら創意工夫をしていくうちにある日フツと良いアイデアがむこうからやってくることもある。

しかし「時にはじっくりと考える時間をもとう」。独創的な研究をする人は変わりものがおおい。いいアイデアを考えつくまで木に登っておてこない人とか。私なんかフツのオジサンなのでそんな奇行はしない。ただ腕をくんで「ウーム」と唸って力んで考えたところでアイデアは簡単にはでてこない。それぞれのやりかたで考える努力をすることも必要であろう。私は若い頃は問題点がでると徹夜で考えた。眠れないようにコーヒーを飲み、思考過程のアソシエーションが良くなり大胆な発想をするためビールを飲み、薬理作用である多幸感に浸りながら、あーでもないこーでもないと考える時間をもった。いいアイデアがでることもあったが、外が白むころには10本ぐらゐの空瓶がころがり、副作用である麻酔作用でもうろうとして堂々巡りを繰り返していた。さらに二日酔いのうつ状態でご自己嫌悪におちいることも多かった。教室の同僚とア

イデア競争をしたことも楽しい思い出である。何らかの考えがまとまれば空理空論に終わらないようきつそう実験にとりかかる。いいアイデアが浮かんで研究がうまくいったとき、幾何学の問題で補助線1本みつくてきれいな証明ができたときと同じ種類の爽快感が味わえる。必死で考えてうまくいった研究をある評論家的先生に「考えたら当たり前のことですね」といわれ頭にきたことがある。しかし良く考えたら「考えたら当たり前ですね」と言わせることはそれが当たり前であることすなわち普遍的真理であることを認めさせたことになる。考えようによっては素晴らしい言葉である。

○研究計画を立てるにあたり、「コントロールをいかに上手にとるか」に50%以上の重点をおこう。コントロールの立て方の良否が研究計画の良否を決める。仮説の証明には必要十分条件がそろわなければならない。場合によってはコントロールは一つだけでなく二つも三つもいることもある。例えば妊娠糖尿病の研究において、非妊娠正常女性(1)、妊娠前(2)、出産後(3)をコントロールとして正常妊娠過程における糖代謝の変化がわかり、正常妊婦(4)をコントロールとして妊娠糖尿病における糖代謝異常がわかる。妊娠糖尿病における未治療群(5)をコントロールとして治療群をしらべて治療効果がわかる。正常児出産(6)をコントロールとして巨大児出産例をレトロスペクティブに妊娠時の糖代謝をしらべて妊娠糖尿病と巨大児出産の関係と治療の効果がわかる。これだけでも6種類のコントロールを使って妊娠糖尿病の全体像についてすこしはわかってくると考えながらやっている。

○「仮説は大胆に、しかし論理的に」。仮説は自分で実験調査して証明しよう、同時に期待する成果をいかに具体的に論文にまとめていくかをイメージしながら研究を進めていこう。すなわちどういう必要十分条件をそろえれば自分が納得しかつ他人を説得できるかを考えながら研究を進めていく。しかし先入観や思い込みが強すぎてもだめである。結果が自分の立てた仮説と反する場合、実験の条件が悪いのか？いかに客観的にデータを出す努力をしたか？厳しく自問自答しなければならない。実験結果が正しいと思えば率直に自分の考えが間違いであることを認め仮説を立て直そう(やわらか頭)。凡人である自分ごときが考えることなど誰でも考えることであり、実験に失敗して自分の考えがおよばなかった事実をつかんだとき、それが他人も考えない新しい発見につながる。終わりよければ全てよしである。赤血球のエネルギー代謝において、deoxyATPはATPの合成および利用のじゃまをし

て正常の代謝を阻害し代謝障害をおこすという仮説をたて、それを証明しようとしたが何度やってもまったく期待した結果は得られなかった。もしかしたら deoxyATP は ATP の変わりとして働いているのではないかと考えを180度変えて実験しなおしたらまさにそのとうりであった。それで別の代謝疾患の説明をある程度つけることが出来た。

○「人間は生物の一種である」ことを忘れるな。分子レベルー細胞レベルー臓器レベルー人体レベルー社会生活レベルを通じて正常と異常の生物学的意義を常に考えよう。

○一つ芋を堀りあてたら根を切らずにまだ芋があると信じ堀り進み次々芋を堀りあてよう。早く堀らなければ他人が堀ってしまう。同じ芋でも料理法を変えれば別のおいしさも味わえる。

○実験にあたり、「いかに客観的であるか？」を心がける。一人で実験するときも結果がでるまで自分自身をダブルブラインドの状態におくようにする。一つ一つの作業について「何の目的で何をどういう原理にもとずいてやっているのか？」「どこに気をつけたら信頼できる再現性あるデーターがだせるか？」「何処がウィークポイントでレフェリーにつっこまれそうか？」「その対策は？」。客観的データーを出すようこまめに考え実行していくとオーソドックスな方法も以外と欠点があり、新しい方法の開発につながる。

○「他人，他の施設を利用しよう」。ギブアンドテイクであれば共同研究しよう，テイクアンドテイクならもちろんのこと，ギブアンドギブであっても何かテイクするものを見つけないが。領域の異なる人々と共同研究する事は大変刺激的で勉強になる。専門家に相談しよう，あとでお礼状を忘れずにしよう。

○研究過程において実験または調査は自分の仮説を「自分自身に納得させる作業」であり、論文を書く事は自分が確信をもった仮説をさらに「他人に普遍的真理として説得する作業」である。この二つのステップが揃って初めて研究をしたことになる。最初のステップだけで満足している人も多い。独創的であるべき研究が独断的、独裁的、独逸的、独走的、独宗的、独想的、独撞的、独蒼的、独葬的、独蔵的などであってはならない。一つの研究テーマが一段落したら論文の下書きが出来ておりただちに清書にもっていけるようにしよう。他の文献を読むとき自分ならこう書こうと考えながら読めば論文の書き方においても大変参考にな

る。早めに論文を書く努力を常にしていないと何となく書けなくなってしまう。研究は時間との戦いでもある。花の命はけっこう短い。新しい発見もどこかで喋ればプライオリティは失われる。

○論文は「他人に読んでもらうために書くものである」。客観的手段で得たデータをもとに論理的に分かりやすく簡潔に、読んだ人が再現出来るように、スマートで学問的に面白い論文を書く努力をせよ。他人を説得するためには客観性と論理性と再現性が必要である。学際的で国際的であるため英文で国際的に通用する雑誌に投稿する。私の師匠である紫田進先生は英文で書いておりかつ世界的に通用している雑誌に掲載されたものでないと論文と認めないと大変厳しかった。現在も私の出身教室（山口大学第三内科）ではそれが伝統となっている。博士論文はほとんどが一流雑誌に掲載されており、それが認められ研究者としての外国留学も多い。喋りっぱなしの学会発表より論文に重点をおこう。学会で喋ったらなにかもう終わったような気分になり論文を書く気力が失せてくる。

○いかにレベルの高い雑誌であろうとも二～三人のレフェリーの頭で審査する。レフェリーが論文の価値を理解出来ない場合当然採用されない。採用されない恋人に振られたように切なく悲しい気持ちになり、送り返された論文を見るのもいやになる。失恋した場合アホな女だとあきらめて立ち直るまでしばらく時間がかかるが、論文の場合アホなレフェリーだと軽蔑し元気を出してただちに他の雑誌に投稿しよう（そう言いながら昨年暮れにリジェクトされたものを投稿しなおしたのは今年の6月であった。反省!!）。しかしリジェクトする理由をレフェリーが書いてよこすから率直な気持ちで十分に読んで有用な意見があれば受け入れ論文を書き直そう。二流雑誌に振られそんな馬鹿なと思い一流雑誌に投稿したら、very interesting paperとレフェリーに誉められて採用されたこともある。

○研究は祈りを込めた修行である。研究は知的ゲームである。研究は高級な道楽である。研究は自分のライフワークである。研究はその人のセンスである。色々な研究にたいするイメージを現した言葉がある。研究領域の違いによりそのイメージも違ってくるであろう。研究を努力しただけ成果があがる一般的な仕事とおなじに考え思い詰めると失敗したとき非常に疲れ立ち直れなくなってしまう。研究成果は個人の努力に比例しない。小学校から秀才でとうしてきたような人ほど失敗したときの落ち込みが激しい。思い込みが激しいと視野狭窄になり「視れども見えず」になってしま

う。おおいに研究を遊びたい（自由な発想と夢を楽しみたい）程度のスタンスで望みたい。それが患者さんのためになり科学の発展に貢献できればおおいに結構ではありませんか。

最後に看護研究における私の期待を述べたい。

飲み友達であるA先生とは一時期「看護とは何か」「看護の専門性とは何か」「看護研究はどうあるべきか」「そのためには我々は何をなすべきか」と大いに議論をしたものである。普段でもよく議論していたが、彼は普通の人と逆でお酒を飲むと真剣になる、けっして酒の肴にしていたのではない。よこからB先生が「もっと面白い話をしようよ」と言っても議論はおさまらない。野球場の外野席で応援団が仲間割れして言い争っているようなものである。応援団がいくら一生懸命でも選手がその気持ちをくんでくれないならば応援のしがないが。我々はもうこの議論はしなくなった。外野席がよほどうるさいと思われたのか選手に「看護のことは看護職に任せてほっといて欲しい」と言われた。A先生は応援にあまり熱が入らなくなってしまったが、私はこの言葉に承服出来ない。もし「医療の事は医療職に任せてほっといて欲しい」などと言ったなら社会問題になるだろう。看護は医療職の一つである。看護における問題点は看護職だけの問題ではない。

医療制度や政治の問題はさておき、学問的には看護学こそ学際的でなければならない。看護科学学会には看護職の人しか研究発表ができず看護職以外の人は正会員になれないそうである。そのため看護職の人と共同研究がしにくいという意見があった。外国の学会では入会制限のある学会も多いが日本では門戸解放が一般的である。糖尿病学会には看護研究の発表セッションがあるし内科学会など医師でない栄養学の先生が研究発表しておられた。生化学会や臨床化学会など医学部、薬学部、理学部、農学部、工学部、保健学部、医療短期大学部その他の出身者でごちゃ混ぜである。

大学受験誌に看護学部は理系であると書いてあった。いつか学園ニュースに「文科学科の時代」と言う小文を書いたように医学も看護学も文系的な面を持っていると思う。医療の第一線である開業医の仕事は半分が文系的である。文系的な面が看護学ではより大きいのか大学院修士論文の重重大さに驚かされる。文系大学院の修士論文はもっと長いですよと言われる軽薄短小志向の私なんかさらに驚かされる。得られたデーターを全て盛り込み、はやりの理論や仮説で説明してある。仮説でもって仮説を証明しているような印象を受け頭が混乱することもある。あまり重要でない不明瞭なデーターに引っかかってそれにこだわってさきに読み進めなくなる。主なデーターをピックアップ

し素直に解釈すれば十分結論が引き出せると思うのだが、盛りだくさんであるため焦点がぼやけて総説的原著になっているように思えるものもある。トレーニングとして研究テーマと関連する総説を別にまとめさせてはどうでしょうか。何故長大な論文を書くのかと学生に聞いたら論文を書く練習だからと言う返事であった。修士課程が終了して教師がこれらをレギュラーペーパーに書き直して雑誌に投稿しておられるようである。一生懸命頑張ってお出したデーターは全てに愛着があり、もったいなくて捨てるに忍びない気持ちはよく解ります。しかしそれを取捨選択して簡潔で分かりやすい論文にすることが論文指導で最も大切なトレーニングだと思います。論文が長いと繰り返し読んで直し練りに練ったものに仕上げられない。間違いが多く同じ文章を繰り返さないと分かりにくくなるためにさらに長くなる。研究内容によっては詳しく書かなければ解りにくいものもあるでしょうが、空理空論の多い純粋な文系論文と違い客観的データーにもとづいて書くのであるから読む人の為に必要十分なデーターと文章で他の分野の人にも分かりやすいスタイルで書くトレーニングをして欲しいものです。すべての修士論文はレギュラーペーパーで書き紀要に乗せるよう義務づけることを提案したい。

修士論文だけにしておくのはもったいないような素晴らしいデーターがそろっており、日本人の特有の考え方や行動を見事に捉えたものがあったので、ぜひ英文でレギュラーペーパーにして外国の雑誌に投稿するよう強く薦めたのですが、長大な修士論文を書くのに疲れはててしまてできなかった。短期間で大変努力して他の大学の教授に博士論文にすべきだと言われたくらい良い仕事をしたのにまことに残念であった。

「看護は共通言語を使わない」とコンピュータに詳しい先生が彼らしい表現で言っていたが、看護学が学問的にれっきとしたアイデンティティをもって学際的に活躍するために文系のみならず理系に対しても共通言語を使うよう希望します。

人の状態や行動を研究対象とすればどうしても主観が入りやすい。インタビューする人の個性、実力、再現性などにより誤差が入りやすい、誘導尋問の可能性も十分検討しなければならない。研究テーマによっては一人では不可能である場合もある。複数での共同研究なりグループ研究を認め役割分担をきめてダブルブラインド形式でより客観的な研究が出来るよう指導すべきである。協力してくれた人も論文の共著者になり恩返しができるとともに成果がその施設にのこりさらなる実用的発展の可能性も生まれる。いかにチームワーク良く研究を進めて行くかが看護研究の現実問題として重要であると思う。医学部での博士論文はカレ

ントコンテンツに紹介されている雑誌のトップネームの論文なら共著者が五人までなら（大学により三人）主論文として認めている。

出来るだけ論文は英文で書くようにして欲しい。日本語の意味を表す適当な言葉がなく研究内容によっては英文にするのが非常に困難である場合もあるであろう。しかし日本人は日本人特有の文化と伝統の上に生活をしており考え方や行動様式も外国人と異なり、我国特有のきめ細やかで質の高い看護が実践されている（アメリカでのレジデント時代のナースの印象はスペシャリティナース、メイルナース以外あまり良くなかった）。当然看護研究において我国特有の研究成果が期待される。外国には存在しないものであろうとも真理として抽出されたものはぜひ世界中に紹介すべきである（ニュアンスの微妙な日本語は zen, wabi, sabi のように国際語にってしまう気持ちで）。日本の特徴的看護研究をおおいに輸出して欲しい。

反対に著名な外国人研究者の意見を無批判に受け入れ看護学は輸入学であるなどと言われないようにしてほしい。良い事のみ選択して取り入れるのも一見合理

的であるように思えるが研究者の意図した事とは変わってくるので問題である。我彼の違いをネガティブな面も含めて十分認識してお付き合いするのが真の国際性につながると考えている。

日本はほぼ単一民族で、単一言語で、社会も安定し、中流意識を持っており、極端な宗教感も少なく、我国特有の美点も問題点も抱えており、インテリジェンスは高く、協力的であり看護研究がもっともやりやすい国の一つであろう。看護研究は手段方法が少なく難しい面もあるが、何でも外国と共通な方法で外国でも再現性のあるデータが出るようにしなければならない研究分野から見れば、日本人そのものがオリジナリティのある存在なのであるから看護研究はやればやるだけ成果があがりそうでうらやましく思える。

大変生意気なことを書いてきたように思います。誤解している面もあると思います。気にさわることは中年蛙の独り言だと思って見逃してください。我国の看護研究が学際的でかつ国際的に発展することを応援団の一員として心からお祈りしています。

（受理日：1992年10月19日）